継往開来
―継承・発展 未来を切り開く―

職人は「心」の仕事です

～日々後進の指導に熱き想いを～

株式会社吉田旗店 取締役会長 吉田 稔さん

明治五年に創業された、株式会社吉田旗店。全国の相撲の幟（のぼり）の約六割を制作しています。その数年間およそ八〇〇本。他にも神社の幟や歌舞伎の幟など様々な旗を手掛けています。今回は現在会長の吉田稔さんにお話をお伺いしました。

幕末、加納藩の武士だった先祖が、和宮内親王が徳川家へご降嫁された出来事を目の当たりにしたことから、これからは武士の時代ではなくなるかもしれないと危惧し、手に職をつけると安心だ、後を継ぐ長男でなければ武士以外の職業でもよいだろうと思ったことから、その当時、岐阜で一番大きかった丁子屋という染物屋に、丁度良い年齢だった四男の茂佐エ門（もざえもん）さんを修行に出しました。その後、明治を迎え修行を積んだ茂三佐門さんが初代として吉田旗店を始めました。

五代目、吉田稔さんは現在八十一歳。家業に入り修業を始めた当時は、まだ生きることに必死な戦後でした。修行時代は職人と寝食を共にし、復員してきた職人たちと共に時間を過ごすうちに、今では継承者が極少になってしまった戦前の染の技術を習得することができました。

その後跡継ぎとなった頃には、時代は機械化へと一気に進み、大量生産の時代へ入っていきました。染物の仕事は、夏は暑く冬は寒いとても辛い作業が多い事から、機械化・合理化していった業者が大半を占めるようになりました。

しかし、そんな時代の中でも稔さんの信念は揺るぎませんでした。

「本当の感動を与えられる旗は心のこもった職人の手によって染められる旗だと思っています。永久に心に残る旗には温かさがあります。機械の物とは格が違います。それを見る多くの人々が審査員なのです」

そんな「本物」を作り続けるために、稔さんが今、全身全霊で取り組むのは「育成」です。

技術と「心」を育てる

稔さんは、後世のために同業者の子どもを預かり、一連の工程を教えています。その期間は四年。本来なら一人前になるまでには十年もの時間がかかると言います。しかし、社会制度や生活様式の変化により昔ながらの方法では職人を育てるのは難しいと考えた稔さんは、手取り足取り教えることで極力修行期間を短縮させました。それはどの季節に修行を始めても地元へ戻った時にすぐに対応できるまでの最短期間です。中には親子二代に渡って修行したという店もありました。

徳育で「心」を育てる

稔さんが岐阜工業高校の色染科を卒業したのが昭和三十三年。当時は全国で二十七高校に色染科や染織科がありました。しかし徐々に縮小され、現在では一校も残っていません。若い人の学ぶ場がなくなっていくことに早くから危機感を持っていた稔さんは、昭和四十七年に志を同じくする人たちと「全国青年印染経営研究会」を立ち上げました。

「技術だけでは良いものは作れません。技術と共に心が出来ていないとうまくいかないのです。ボランティア精神が無くては良いものは作れません。世の中に奉仕する心があればあるほど良いものが出来ます」

学校で教わるのが教育、家庭や周りの人から教わるのが徳育。徳育がないと職人として大成しない、と稔さんは力強く語ります。

「染めるときも、染め上がったものを手にとったときも『良い仕上がりになってくれてありがとう』という感謝の心がないと職人は長続きしないし、人に感激や感動は伝えられません」

稔さんの元には毎日のように全国各地から相談が寄せられます。戦後の染め方しか知らない職人たちから「今の染料でこの色はどうやって出せばよいのか」など、戦前の知識を必要とする多くの事柄に、稔さんはひとつひとつ丁寧に、その知識を惜しみなく伝えます。

そして、これまでの努力は令和三年度卓越した技能者（現代の名工）受賞という栄誉として結実しました。

旗づくりは日本人の「心」を表す職業

戦争やバブル崩壊など、これまでにも困難のたびに世の中が大きく変わりました。コロナ以降もそうなるであろうと稔さんは危惧しています。

「職人は先を見ることが苦手です。目の前の仕事だからです。遠く先まで見えることのできる目を持っている人が少ないのが職人です。変化に私たち職人がどう耐えられるか、当面小さく耐えて大きな波を超えることに専念していくしかないでしょう。しかし耐え忍んだその先には日本人として一番大事な心の癒しを残すことが出来ると思っています」

稔さんは、感謝や願いのこもった幟には、不思議な力があると言います。

「例えば大相撲の幟が沢山立つことで心が華やぎ、興奮して感動します。多くの船に大漁旗が掲げられた姿を観れば、誰もが一緒に大漁を願うでしょう。旗づくりを、日本人の心を表す職業として残したいし、残っていくと信じています。先人たちがあらゆる困難の波を乗り越えてきたように、このコロナ禍を乗り越えて次の世代にうまくバトンタッチしていきたいと思っています。きっとみんな乗り越えられると思います。そしてその先、百年先もその心は続いていくと思います」

現在、社長を務める息子の聖生（まさお）さんが六代目を継いでいます。聖生さんは若い頃、機械化した同業者の元で二年間修行しました。外の世界を見てきたことで、手作業の尊さを痛感したといいます。現在、筒引きと呼ばれる工程を任されている聖生さんはこう語ります。

「季節によって材料の混ぜ方や配合などが違うので一通りの作業を知るまでに一年かかります。ですので二年目から勉強です。この作業を自分のものにするまでに五年かかりました」

後を継いだ聖生さんは稔さんの「心」をしっかりと受け止め、後世へと引き継いでいくに違いありません。

「筒引き」と呼ばれる染料がはみ出ないように糊置き作業をする六代目の聖生さん（左）

白生地に水で落ちる染料で下書きする稔さん

株式会社吉田旗店
所在地　岐阜市青柳町6-5
TEL　058-251-1852
FAX　058-251-1597